いふのと同じ程の義だといふ＝に譯した」とあり、第二には「また四 küsän の學者の國に」云々とあり、第三には küsän の語から Toχri（卽ちトクハラ）の語に譯し、Toχri の語から新たに Türk の語に譯した」とある。トルコ語の行はれるに至つた以前の龜茲の語といふのは一種のアーリヤ語で、そうして所謂トクハラ語とは方言的の類似こそあれ、可なり甚だしく違つて居り、殊にトクハラ語といふ名稱は古の焉耆地方を中心にして出土する佛典に用ゐられた語に對する名稱で、龜茲地方のそれに對して稱すべき名では無いと認められて居る[22]今日では küsän を曲先卽ち龜茲と解釋しても、これ等の文書に記されて居るところを差支なく說明し得ると信ずる。

以上述べた所に依ると qaml も solmï (sulmï) も küsän も、すべ蒙古時代から史乘の上に名を現はすことになつたと認められて居る土地である。從つて此等の摩尼教や佛教に關係した文書經典は皆また蒙古時代になつてから書かれたものと見られなければならぬかの如く思はれるかも知れない。併しそれは、勿論皮相の見たるを免れない。何となれば蒙古時代以前の漢史に見えるこの地方の地名は、所詮漢人のそれに對する稱呼を書き殘したに外ならぬのであつて、その地の人もしくはトルコ族などが何と呼んでゐたかについては、特別の記事の無い限り確證を與へるものではない。假令その多くが土名やトルコ名などと相合し、もしくは近似して居つたにしても、悉べてが同樣であつたと斷ずることは出來ない。例へば玄奘の西遊の時に、唐では舊來の名稱を承けて于闐と呼んで居つた地に對し、その俗語では喚（漢、渙）那卽ち Hvaṃnä, Hvannä[23] と稱して居つた如きはその一例である。蒙古時代の記錄や元史などに、初めて此の地方を呼ぶ蒙古名や、蒙古名の基く所と思はれるトルコ名の見えるのは、蒙古族自からの記錄がこの時代から殘されたり、また彼等の政治的勢力の發展し、支那に君臨したのに伴つて起つた現象